

脱いじめ話し合ふで

ノルウエーの「学校仲裁所」を訪ねて

北海道新聞東京政経部

宇野 一征

少し古い話で恐縮だが、ちょうど1年前のことになる。会社の研修制度を利用して10日間ほどノルウエーを訪ねた。日ごろの取材で「ノルウエーは世界的にもいじめ問題克服の先進地として知られている」という話を聞き、一度は訪れたいと思つて

いた国だった。最も印象的だったのは、いじめの芽を摘む効果があるとして国内の多くの学校が導入している「学校仲裁所」という制度だ。校内で児童がもめ事を起こした場合、当事者同士に徹底的に話し合わせて仲直りに導くユニークな取り組み。暴力に一切頼ることのない和解の手法や考え方を子どもたちから学ぶことは、深刻化する日本のいじめ問題に歯止めをかけるヒントにならないだろうか。

◇ 苦い思い出がある。

小学校5年生の時、ひよんなことから同級生の一つ年下の弟と殴り合いのけんかになった。相手が私の親友の悪口を言い、許せなくなった。けんかは当時、私の体が比較的大きかったこともあり、ほぼ一方的にやりこめてしまったが、翌日以降、同級生に「弱い者に手を出すひきょう

者」というらしく印を押された。約一カ月間、無視されたのである。

けんかの最中ずっと、周囲で見ている人たちに止めてほしかった。下級生に手を出すことへのためらいは、相手が倒れるたびに私の心の中で膨れ上がっていたし、相手も引つ込みがつかず、虚勢を張っている様子が見てとれたからだ。

けんかやもめ事は、子どもたちの自分のように、当事者同士の意地の張り合いがどんな事態を悪化させていくケースも多い。前置きが長くなったが、ノルウエーの学校仲裁所は、そんな子どもたちのいさかいやもめ事を児童たちの力だけで解決する取り組みだ。

◇ 上の写真を見てほしい。小さな教室に、小学校4年生の男子2人が6年生の女子2人をはさんで向かい合っている。ノルウエーの首都オスロ

市内にあるティウルレイケン小学校で開かれた学校仲裁所のひとコマだ。男子2人はこの日朝、取っ組み合いのけんかをした。

女子A「なぜあなたはけんかをしたの？」

男子A「相手に首をつかまれてイライラしたんだ」

女子B「では、あなたは？」

男子B「Aに『僕の方が強い』と言われて意地になった」

話し合いを仕切る女子2人は「仲裁員」と呼ばれる。生徒会長などと同じように公募で選ばれた児童たちだ。仲裁員は「自分の方が強いと思つたのね」「どうすれば解決できると思う？」などと、男子2人に交互に問いかける。

こんなやりとりが十数分間続き、男子の1人が「もつと寛容になるべきだった」と初めて反省の弁を口にした。仲裁員は徐々に胸の内を語り始めた2人の様子を見ながら、「では仲直りの合意書を作りませんか」と提案した。男子2人は同意し、書面にサインをした後、握手を交わした。

◇

学校仲裁所は1995年、ノルウエー政府が国内の各小中高校に導入



ティウルレイケン小の学校仲裁所。仲裁員の女子2人の主導で、仲直りに向けた話し合いが進む

を勧めた。いまではオスロ市内だけで、全体の約3割に当たる47校が採用している。英国やデンマークなどでも導入例があるという。

最大の特徴は、教諭が一切介入しないことだ。仲裁員ともめ事の当事者は①事実だけを話す②相手のことを悪く言わない③相手が話しているときに口を挟まない④相手を理解するように努力する—といったルールに従って話し合いを進める。加害者と被害者の区別や善悪の判定はしない。あくまでも仲直りが前提だ。

たいていの当事者は、話し合いを進めるうちに「嫌な思いをしたのは自分だけではない」「自分にも非があった」などと思いはじめるといふ。仲裁員が和解を促すタイミングは、この瞬間だ。当事者が互いに譲らなければ「距離を当分置いて会話をしてはいけない。その後、改めて話し合

う」という内容の合意書が交わされることも。その場合、2週間後に再度会合を開き、わだかまりが残っているかどうかを確かめるなど、フォローをきちんと行う。

仲裁がこのように円滑に進むのは、各校の先生と子どもたちが仲裁所の役割や意義を事前にしっかりと学んでいるからだ。仲直りの合意書の作成や話し合いのルールは、すべてマニュアル化された技術。01年に導入したティウルレイケン小の場合、5年生になると、全員が学校仲裁所について勉強し、仲裁員を選ぶ。児童の一人は「立候補する人は多いよ。仲裁員になると、親や友達から『すごいね』って言われるんだ」と話す。学級代表や生徒会のようないずれも置かれるポストのようだ。

オスロ市内には、仲裁の手法を学校などに教える専門の民間企業がある。その一つ「クリンシュ」は、同市の依頼を受けて各校にノウハウの指導に出向いている。同社のカーリ・オッデン氏は「もめ事を起こした後、仲直りするにはどうすれば良いか、最もわかっているのは当事者たち。小さいころから話し合いで解決する習慣をつけることが、結果的にいじめの撲滅につながる」と強調す

る。

事実、オスロ市内の4小学校が07年にかけて行った調査では、制度導入後、いじめの発生件数が最大6割減ったと回答した。同市教育課は、もめ事がいじめに発展する事態を未然に防ぐ効果があるともみる。オスロ市内のディーセン小学校の教諭は学校仲裁所を「いじめを予防するワクチンだ」と表現した。



学校仲裁所の理念や手法は、91年に設置されたノルウェー法務省の管轄下の「紛争審議会」を手本としている部分が多い。未成年者が刑事事件を起こした場合、加害者と被害者が話し合う場を設け、和解の道を探る専門機関。国が新聞広告などを通じて公募で選んだ仲裁員が当事者同士の話し合いを仕切り、和解すれば、加害者の大半の罪が帳消しになるという。

例えば、こんな事件があった。16歳の少年2人がある日の夜、個人経営の商店の窓ガラスをすべて壊して逃げた。2人はその後まもなく警察に補導され、事案は審議会に持ち込まれることになった。

店主と加害者の少年2人は審議会場で初めて顔を合わせる。店主は



モダンな建物が並ぶオスロ市中心部

2人に会うまで、ずっと「金銭などの脅迫が目的だ」と思い込んでいた。だが、酒に酔った弾みで犯行に及んだという事実を2人の口から直接聞き、「少し安心した。今回は許してあげよう」という気持ちになったという。2人は、被害者に「店の掃除を当分手伝う」という約束を文書で交わし、罪は免除された。

神妙な面持ちで反省の弁を語る2人の態度などが、店主の心を溶かしたことは想像に難くない。審議会のタール・ストールビク氏が言う。「被害者が、犯行動機や犯行当時の心境を加害者から直接聞く機会は極めて少ない。第三者の立ち会いのもとで話し合えば、刑事事件として処罰しなくても、平和的な解決ができるケースは多い」



国内の大人たちが一丸でいじめ問題に取り組むことを約束したマニフェスト



ダン・オルヴェウス氏：いじめ問題の世界的権威。いままも現役でいじめ根絶に取り組んでいる



ニルス・クリスティ氏：「もめ事は財産だ」と語る世界的な犯罪学者

年々増え、昨年は1297件に達した。加害者の9割強が被害者と交わした約束をきちんと守り、加害者たちが再犯に走る可能性はほぼゼロだという。



ノルウェーでは80年代、いじめによる小・中学生の自殺が相次いだ。以来、政府は「いじめ防止全国キヤ

ンペーン」と銘打つ取り組みを開始。同国を代表するいじめ問題の研究者でベルゲン大学教授のダン・オルヴェウス氏が考案した「いじめ防止プログラム」の導入を後押しし、その効果を検証した。

その後もさまざまな有識者がオルヴェウス氏とは異なる独自の対策を提案し、国は各学校の判断で自由に対策を選んで導入できる仕組み作りを整えていった。学校仲裁所も、こうした状況の中で採用されたいじめ防止策の一つだ。

さらに02年には、首相と教職員組合、学校経営者の各全国組織の代表者らが共同で、いじめ問題について「子どもや若者たちが、いじめや差別、排除にさらされないことを確実にものにするために協働する」「いじめの予防と対処には、強いリーダーシップが必要だ」などの文言を盛り込んだマニフェストに署名。国を挙げて対策を強化する機運が一気に高まった。

翌03年には、首相が元日に行う恒例のスピーチで「国としていじめ対策に取り組む。私たち一人一人が、いじめの対策となるような環境をつくってほしい」と撲滅への決意を表明。04年の元日にも、社会人の職場

でのいじめ問題に触れ、「いじめに遭っている社会人は国内で20万人もいる。労働災害による死亡よりいじめ自殺の方が多し」と訴えた。



首相自身が公の場でいじめ根絶を宣言し、専門家のいじめ対策を国が支援するなど、まさに国家的な取り組みを進めてきたノルウェー。20年余りの歳月を経て、いじめは学校現場からなくなったのだろうか。

「インターネットや携帯電話のメールを使った中傷などが深刻になっている」。ノルウェー教育局責任者のペーデル・ストッケ氏から意外な答えが返ってきた。

いじめの発件数の推移を示す正確なデータはないが、「根絶された」とは言い難い数字がある。ノルウェー教育局が行った昨年の学習環境調査では、小中高校合わせて、全生徒の5%に当たる約4万人が一週間に一度はいじめられていることが判明したというのだ。

国が奨励するいじめ対策も、さまざまな課題が浮かび上がっていた。学校仲裁所については、一部の専門家が「根本的ないじめ問題の解決には足りない」と批判。オルヴェ

ウス氏も「いじめともめ事はそもそも異なるもの。いじめを子どもだけで解決するのは不可能で、親や学校の先生も巻き込んだ特殊な防止プログラムが別途必要だ」と断言する。学校現場では、けんかを起こした児童が制度に慣れてしまい、仲裁自体が骨抜きになる懸念も一部で指摘されている。

オルヴェウス氏が提唱する対策を含めたさまざまないじめ防止プログラムも、各学者がそれぞれ対策のメリットや独自性を主張しており、どれが高い効果を生むのか不透明な点が多い。こうした事情もあり、多くの学校は現在、いじめを未然に防ぐ学校仲裁所とオルヴェウス氏がいじめ防止プログラムを組み合わせるなど、複数の対策を導入している。



ノルウェーもまた、日本と同じように深刻化するいじめ問題に悩み続けているのは間違いないようだ。しかし、首相をはじめとする国内の大人たちがいじめ問題に対する無責任さをマニフェストという形で率直に認めたり、システム化されたいじめ防止プログラムの導入を国が支援したりする意識の高さは、少なくともいまの日本にはない。



学校仲裁所の仕組みなどを熱心に聞く藤岡さん。日本にも導入してほしいという＝クリンシュ社

それ以上に注目すべきなのは、さまざまな課題があるにせよ、もめ事やいじめを、仲裁や和解という極めて平和的な手段を使って解決の道を探ろうとしている点だろう。

世界的な犯罪学者ニルス・クリステイ氏は、単に善悪を裁くことは真の再犯防止につながらないという理論「修復的司法」を提唱し、仲裁や和解の理念をノルウェー国内に広げた。学校仲裁所の導入も紛争審議会の設立も、実はこの理論が原点だ。

クリステイ氏は、紛争（もめ事）は財産だと強調する。「いじめにしても犯罪にしても、加害者と被害者を分けて刑罰などを与えると、加害者をその集団や社会からはねのけることになる。これは損失だ。お互いにはっきり自分の思いを口に出せる状況を一つ一つあげることが、相手を

理解することにつながり、その理解が平和的な解決の第一歩となる」

紛争処理のプロセスこそ人間にとって学びの場であり、成長に至る重要な機会になるという論法だ。そして、各教育機関は一貫してこの考え方に基づき、いじめ問題と向き合っている。

先進的な対策を講じているノルウェーでさえも、いじめ根絶への道りはまだまだ遠い。しかし、問題を解決するために必要な理念を、大人から子どもまでほぼすべての国民がしっかりと理解しているという点で、日本の何歩も先を進んでいることは確かだろうだ。

〈あとがき〉
ノルウェーの電車や地下鉄は意外なほど静かだ。

車内でおしゃべりする乗客が少ないという意味ではない。車内放送が「次は〇〇です」という駅名を告げるだけで、極端に少ないのだ。改札口にも切符を通す機械が設置されておらず、改札機を通過する際の機械音や警音は聞こえない。

「携帯電話の使用はご遠慮下さい」体の不自由な方やお年寄りに席をお譲り下さい」。あらためて日本の公共交通機関を利用すると、車

内放送の何と過剰なことだろう。改札機にしても、最近ではSuica（北海道ではKitaca）などのIC乗車券が普及して利便性は向上したが、徹底したキセル防止策という意図があるのではないかと、いぶかってしまった。

「ノルウェー人たちの精神的な成熟度の表れではないかと思うんだ」。滞在中に宿を提供してくれた上、一緒に取材にお付き合い頂いた元恵庭市議の藤岡登さん（58）は「勝手な思い込みだけ」と苦笑いをしながら、公共交通機関の静けさのわけを「推理」してみせた。

藤岡さんは、学校仲裁所を含むノルウェーの先進的ないじめ問題への取り組みを学ぶために議員を辞め、07年8月から08年6月までオスロ大学に留学していた。到着後、最初に違和感を持ったのが公共交通機関の「静寂さ」。多くのノルウェー人と接するうち「日本と比べて、多くの国民が相手を『分別を持った大人だ』と信頼しているからではないか」と考えるようになったという。

なるほど。相手を信頼していれば、注意を促す車内放送も必要ないし、改札機も必要ない。公共交通機関の静けさとノルウェーの国民性を

単純に関連づけるのは論理の飛躍だが、一連の取材を通じ、ノルウェー国民の成熟した人間性を実感することが多かった。例えば、いじめが起きた際、加害者と被害者の親たちが「私の育て方に責任がある」と認めるケースが多いという。学校側の責任がクローズアップされがちな日本とは、考え方の出発点が異なっている。

学校仲裁所というユニークな制度は、もしかすると仲裁や和解などの理念をすんなりと受け入れるノルウェー国民の高い意識の上に成り立っているのかもしれない。だとすれば、いまの日本が単にこの制度を導入しても、形骸化してしまわないだろうか。

藤岡さんは、帰国後もいじめ対策の研究を続け、ノルウェーがその先進地であり続けられる背景を解き明かさうとしている。「ぼく一人じゃなく、興味のある大人たちと一緒に考えていきたいんだ」と藤岡さん。その意志と行動が、いつか日本のいじめ根絶に結びつく力になると信じていたい。

（藤岡さんのメールアドレスは ntujok@fantasy.plataoj.jp）